

HEALTH

校区に生きる

かこしま小中学校再編 第2部

3

高齢者への声掛け、見守り…。地域福祉では、小学校区のような小さな単位が最適とされる。鹿児島国際大福祉社会学部教授の高橋信行さん(56)「地域福祉論」は、「市町村単位では広すぎて、お年寄りの顔が見えなくなりがち」と説明する。子どもを見守る防犯活動にも同じことがいえる。

「気をつけて帰りなさいね」。鹿屋市北部の山あいにある輝北小学校。午後3時、輝北地区の地域学校安全指導員、重田久代さん(60)は、徒歩で帰宅する児童に声を掛けた。傍らで、次々とスクールバスに乗り込んでいく子どもたちがいる。

今年4月、輝北地区の5校(百引、市成、平南、高尾、岳野)1990年

■山あいのスクールバス



5校が統合、見守り不安

から(休校)は統合され、旧百引小の敷地に新築した校舎で輝北小としてスタートした。校区は旧輝北町域の89平方メートル。全児童161人中89人がバス通学になった。

旧4校区に10人程度ずつ計約40人いた、重田さんをサポートする地域ボランティアは10人に減少。以前は一緒に下校し、



利用者名簿で名前を確認し、バスに乗り込む児童
=9月12日、鹿屋市輝北の輝北小学校

時に正門前や停留所で声を掛けをする。時には青色回転灯をつけた車で下校のスクールバスを追い、停留所で降りる児童の安全に目を光らせる。

たわいもない会話から通学路の危険箇所の説明まで直接教えられていたが、「人手不足もあり、きめ細かな指導が今はできない」と漏らす。

「みどりの園」(入所者70人)は2009年、職員によるボランティアの青パト隊を結成。午前8時から午後5時に、ディスプレイの送迎を兼ねて地区内を巡回する。

全体で子どもを守る意識が低下する心配もある。旧市成小校区に住む無職大久保麗子さん(82)は「子どもの姿を見なくなり、同じ地域に住む子ども顔も覚えられない」という。重田さんは「防犯には住民の協力が不可欠。欠学校在籍者が減少し、地域の防犯意識の希薄化につながらなければよい」と危ぶむ。

同大教授の高橋さんによると、北海道紋別市や兵庫県三木市では住民がスクールバスに便乗し、買い物などの足として使う例がある。「バスを子どもと高齢者が交流する場にしてはどうか。地域の防犯力を維持するための人間関係、つながりが生まれるはず」とアドバースする。

学校の統廃合された今年からは、防犯や非行防止を目的に、旧市成小の校庭の草刈りなど清掃活動を始めた。「子どももお年寄りも、地域全体で見守るのが理想。地域の結束を強める場所になれば」。広くなった校区を見守る取り組みは続く。

で送迎するため、事件や事故に巻き込まれる危険性が減ると期待される。一方で、徒歩の区間はほぼバス停と自宅の間だけ。集落の住民が児童と接する機会は減り、地域

6台でスタートした青パトは現在10台。青パト運転の資格を持つ職員は関連施設を含め100人を超え、行方不明になった高齢者の発見に貢献した実績もある。施設長の吉元みどりさん(48)は「1日に約40世帯の家を回るから、一人暮らしのお年寄りや、不審者に関する情報も入りやすい」と老人ホームならではの強みを話す。

地域の連携を強め、防犯につなげようと、輝北地区では民間団体による活動が始まっている。特別養護老人ホーム

「子どももお年寄りも、地域全体で見守るのが理想。地域の結束を強める場所になれば」。広くなった校区を見守る取り組みは続く。